

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ミクス・テオドラキス作曲 ヤニス・リッツォス「ロミオシーニ」
Author(s)	土居本, 稔
Citation	プロピレア , 23 : 83 - 100
Issue Date	2017-08-31
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00044339">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00044339</a>
Right	Copyright (c) 2017 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	



ミクス・テオドラキス作曲  
ヤニス・リッツォス「ロミオシーニ」

土居本 稔

はじめに

ヤニス・リッツォス（1909－1990）がギリシア内戦時の1945年から1947年にかけて創作した詩集「ロミオシーニ」から選んで9曲の歌集をミクス・テオドラキス（1925－）が1966年に作曲した。当時はリッツォス、テオドラキスともに左翼の活動に深く関わり、作品の発表には幾多の困難を伴った。

しかし、これらの曲はギリシア人にはもちろん多くの外国人にも支持され現在まで歌われてきた。とくに「かれらが握手するとき」と「鐘が鳴るだろう」の2曲は有名である。政治的に左翼に属する2人の芸術家の作品が、政治的立場を越えて支持された理由を文学と音楽の両面から考察することがこの研究ノートの目的である。

「ロミオシーニ」の日本語全訳は筆者の知る限りまだ出版されていない。テオドラキスの作曲した9曲の歌詞の筆者による試訳は、リッツォス研究者の米国ダートマス大学教授のPeter Bienと、テオドラキス研究者の米国コーネル大学教授のGail Holstの部分英訳、およびギリシア人のManolis Aligizakis<sup>1</sup>の英語全訳を参考に行った。リッツォス特有のシュルレアリスム的な表現や左翼のプロパガンダ的な表現の有無に留意しながら、これら三者の英訳と筆者の和訳との比較、相違についても記述した。

試訳に使った歌詞は、ΜΙΚΗΣ ΘΕΟΔΩΡΑΚΗΣ, *Μελοποιημένη Ποίηση, ΤΟΜΟΣ Α, ΤΡΑΓΟΥΔΙΑ*から引用した。「ロミオシーニ」原詩との比較も行なった。

また、上述の「かれらが握手するとき」と「鐘が鳴るだろう」の2曲については、楽譜を参照しながら詩句とメロディーとの関わり方について記載した。

---

<sup>1</sup> Manolis Aligizakis は 1947 年クレタ島生まれの詩人・小説家・翻訳家である。1973 年にカナダへ移住。様々な職業を経たのち、出版社を起し自らの作品・翻訳を出版している。

## Peter BienとGail Holstの解説と論考

Peter Bien、およびGail Holstの著作から、「ロミオシーニ」創作の経緯とその作曲、そして大衆の受容、当時の歴史的背景と社会情勢を踏まえた解説と論考を引用して紹介する。引用英文の和訳は筆者による。

### Peter Bien<sup>2</sup>

ギリシア人のだれもがドイツ人が引き揚げるやいなや復興が始まることを望んでいた。しかし、自国民の外国の支配者からの分離は、ギリシア人同士のさらにひどい分裂に取って代わられた。ギリシア解放後ほとんどすぐに発生した最初の内戦ではイギリス軍の戦車により1944年12月に左翼の支配する抵抗運動が蹂躪された。EAM<sup>3</sup>の希望のこの敗北は、その後続く激動の時期にすべての過激派とリベラル派に対して取られた抑圧的な手段により悪化して、そのあいだ右派と左派の分裂を増大させただけで第二次内戦へと移行した。

その移行期(1945-7)に、リッツォスはギリシアで起こっている出来事を国連、イギリス、そしてソ連に認識するよう訴える活動に他の芸術家とともに加わった。一層重要なことに、敗北した抵抗運動の戦士達へ、さらにギリシアの自由のためのすべてのこれまでの闘いと将来の闘いに対する荘厳な貢ぎ物を創作することに着手した。「ロミオシーニ」(ギリシア人らしさ)と適切に呼ばれるこの作品は、ドイツ軍と戦い、その後第一次内戦で戦った男達を、ギリシア独立戦争時のミソロンギの籠城軍、あるいはディゲニス・アクリタス<sup>4</sup>のような中世の伝説的な信念の人、民謡で歌われた有名な叙事詩的な偉人、に匹敵する国民的英雄のように見なしている。(中略)

「ロミオシーニ」はそれが書かれたときには出版できなかった。第二次内戦の後、数年後の1954年に発表され、ミキス・テオドラキスが1966年に詩のいくらかの部分作曲するやいなや再び脚光をあび、リッツォスの詩を再度きわめて多くの大衆に知らしめたが、その直後にリッツォスとテオドラキス両者の作品が1967年4月21日の軍事独裁体制により発禁となった。

---

<sup>2</sup> Yannis Ritsos: *Selected Poems*. Translated by Nikos Stangos with an Introduction by Peter Bien の Introduction P.28-30 より引用。

<sup>3</sup> EAM=Εθνικό Απελευθερωτικό Μέτωπο 民族解放戦線。1941年創設の秘密組織でギリシア共産党が領導。ドイツの占領に対する抵抗の主力となり1944年EAMが実質上単独で全土を解放した。(筆者注)

<sup>4</sup> ディゲニス・アクリタスは、11世紀から12世紀にかけて成立したと推測される、ビザンツ時代の東部辺境での異民族との戦いやその英雄についての叙事詩。19世紀後半にその存在が知られるようになった。(筆者注)

## Gail Holst<sup>5</sup>

リッツォスはテオドラキスがギリシアでもっとも共感をもった詩人である。リッツォスはテオドラキスと同様に多作の作家であり、そして左翼の運動に深く関わっていた。「ロミオシーニ」歌集の9曲は、エリティスが詩集「アクション・エスティ」で行なったように、リッツォスが近代ギリシア史の出来事を現代の叙事詩に具体化しようと試みた比較的長い詩の中のいくらかの部分の作曲である。リッツォスの中心テーマは、ディゲニス・アクリタス時代からの、そしてクレフティス<sup>6</sup>と独立戦争から第二次世界大戦とその後の内戦時の抵抗勢力までの抵抗 – 「ロミオシーニ」、つまり独立を求めるギリシア精神、である。

詩の中で繰り返されるイメージは、鐘の音、革命を知らせる鐘、死の合図である鐘、そしてギリシアの不安定な自由を脅かす危険への警告を知らせる鐘である。テオドラキスは歌曲集のなかの重要な統一性をたもつ装置として鐘をモチーフに使っている。最初の歌である「これらの木」はブズーキとピアノのニ短調で始まり、そして鐘の鳴る和音が、「このような長い年月」の出だしでホ短調で、「木から木へ」でヘ短調で、そして「鐘が鳴るだろう」において繰り返される。開口6度音程の2番目の鐘のモチーフは、歌曲集の5番目と9番目に現れ、ブズーキで演奏される単一調子で繰り返す音符の3番目のパターンが「かれらが握手するとき」の歌に現れる。

リッツォスが「ロミオシーニ」の中で描く風景は、荒々しい光を発する岩のようである。その言葉は、ギリシアの民衆詩をわざと思い起こさせる。それはクレフティスの民謡とクレタ島のリジティカ音楽<sup>7</sup>からの音色を、符合する成句と繰り返される行に重ね合わせる。「ロミオシーニ」の誇りとする精神は、苛酷な生活にもかかわらず堅固で禁欲的な名誉のおきてを守ったギリシアの山岳戦士に由来している…（中略）

最初の歌から、歌曲集の音色は作られている。鐘がゆっくり鳴り、メロディーが同じ調子の音符、歌曲集を通じて繰り返す生じるモチーフで始まる。男性

---

<sup>5</sup> THEODORAKIS, *Myth & Politics in Modern Greek Music*, Gail Holst, P.112-118 より引用。

<sup>6</sup> クレフティスは、本来孤立無援の山賊のことだったが、その襲撃の対象が裕福なトルコ人が多かったために、19世紀初めの独立戦争の際にトルコへの抵抗運動の中心勢力となっていった。  
（筆者注）

<sup>7</sup> リジティカ音楽は、クレタ島西部の最高峰レフカ・オリ山の山麓一帯（πιζα）の村々が発祥とされ、その名からPIZITIKAと呼ばれる。オリジナルな歌い方は楽器の伴奏なしで、手拍子を取ったり、机を叩いたりして歌われる。ビザンチン音楽や中近東からの侵略者の音楽の影響を受けた。（筆者注）

の声（オリジナルの録音はビスィコーツィスの声）が低く入り、安定したリズムを強調するが、2/4、4/4、そして3/4拍子にさえ変化する。（中略）

ギリシア民衆歌謡に対し非ギリシア人の聴取者が抱く特質のひとつは、ある種のメロディーとリズムの陽気さや甘美さと、悲劇的な内容さえもある歌詞の苦々しさとの明確な対照である。ギリシア人はこのようなムードのあからさまな不一致にしばしばこだわらない。

非ギリシア人にとってたしかに、「皆のどが渴いていた」のような歌はほろ苦い辛辣さを持ち、それは西洋音楽ではめったに出会わない。歌手が恐怖の苦難を呼び起こしているあいだ、やさしい二長調のメロディーが子守歌のように聴き手を揺すってなだめる…（中略）

「ロミオシーニ」ほど、大衆に人気のあるテオドラキスの作品はない。この成功のどれだけ多くがリッツォスの詩によるものなのか？ 現代ギリシアの民間伝承の一部となったこのメロディーを聴かないでその詩文を読むことは今はほとんどできない。たしかに、テオドラキスのメロディーの不朽の簡明さ、詩と音楽の両方に意識的に使える簡潔さ、に適したもっとよい詩は他にはなかった。

リッツォスとテオドラキスはともに、ギリシアの伝統的な芸術様式をたびたび参照している。そして、そうすることによって両者は知性的な芸術家に普通許される十分に広い認知を得た。他方、「ロミオシーニ」の歌はギリシア国外の聴衆にも非常に人気がある。たとえ歌詞やメロディーのもとになった受け継がれた伝統を理解していなくとも音楽には人の心を動かす強い力がある。

\*\*\*\*\*

## テオドラキス作曲「ロミオシーニ」の試訳

### ΡΩΜΙΟΣΥΝΗ

「ロミオシーニ」(\*1)

#### 1. ΑΥΤΑ ΤΑ ΔΕΝΤΡΑ

Αυτά τά δέντρα δέ βολεύονται μέ λιγότερο ουρανό,  
αυτές οι πέτρες δέ βολεύονται κάτω από τά ξένα βήματα,  
αυτά τά πρόσωπα δέ βολεύονται παρά μόνο στόν ήλιο,  
αυτές οι καρδιές δέ βολεύονται παρά μόνο στό δίκιο.

Ετούτο τό τοπίο είναι σκληρό σάν τή σιωπή,  
σφίγγει στόν κόρφο του τά πυρωμένα του λιθάρια,  
σφίγγει στό φώς τίς ορφανές ελιές του καί τ' αμπέλια του.

*Δέν υπάρχει νερό. Μονάχα φώς.  
Ο δρόμος χάνεται στό φώς κι ο ίσκιος τής μάντρας είναι σίδερο.*

#### これらの木

これらの木はより小さな空には似合わない、  
これらの石は外国の足下には似合わない、(\*2)  
これらの顔は太陽にしか似合わない、  
これらの心は正義にしか似合わない。

この風景は沈黙のように過酷であり、  
焼けた石を胸元に抱きしめ、  
孤児のオリーブの木とぶどうの木を光の中で抱きしめる。(\*3)

水はない。光だけだ。  
道は光の中に消え失せて柵の影は鉄になる。(\*4)

- 
- \*1 Ρωμισούνηは、「現代ギリシア人、ギリシア人氣質」を意味する。Ρωμαίος（東ローマ帝国の市民）に由来する。
- \*2 Holst訳は、“It doesn’t suit these stones to be under foreign feet”。
- \*3 Holst訳は、“Presses in the sun its lonely olives and vines”。
- \*4 Holst訳は、“And the shade of the sheep pens is iron”。μάντραは、「柵、塀、小屋、羊小屋」の意。Aligizakis訳は、“the shadow of the fence wall is made of steel”。
- 斜体は繰り返しの歌詞。以下同じ。

## 2. ΟΛΟΙ ΔΙΨΑΝΕ

Όλοι διψάνε. Χρόνια τώρα. Όλοι πεινάνε.  
Τά μάτια τους είναι κόκκινα απ’ τήν αγρύπνια,  
Μιά βαθιά χαρακιά σφηνωμένη ανάμεσα στά φρύδια τους  
σάν ένα κυπαρίσσι ανάμεσα σέ δύο βουνά τό λιόγερμα.

Τό χέρι τους είναι κολλημένο στό ντουφέκι,  
τό ντουφέκι είναι συνέχεια τού χεριού τους,  
τό χέρι τους είναι συνέχεια τής ψυχής τους-  
έχουν στά χείλη τους απάνου τό θυμό  
κι έχουνε τόν καημό βαθιά βαθιά στά μάτια τους  
σάν ένα αστέρι σέ μιά γούβα αλάτι.

### 皆のどが渴いていた

皆のどが渴いていた。まさにその時だ。皆飢えていた。  
かれらの目は不寝番のため赤い、  
一本の深い割れ目がかれらの眉のあいだに打ち込まれて  
日没時にふたつの山のあいだに立つ一本の糸杉のように。(\*1)

かれらの手は小銃に固定され、  
小銃はかれらの手の延長となり、  
かれらの手は魂の延長 —  
かれらの唇の上に怒りが現れ

そして、目のとても奥深くに悲しみをたたえる  
岩塩を掘った跡の地面の穴の中のひとつの星のように。(\*2)

---

\*1 Holst訳は、“A deep crack wedged between their brows / Like a cyprus between two mountains at sunset.”。 Aligizakis訳は、“a deep wrinkle is wedged between their eyebrows like a cypress between two mountains at sundown”。

\*2 Aligizakis訳は、“they have anger on their lips and grief deep within their eyes like a star in a pathhole of salt”。この「星」はシュルレアリスム的な表現か。

### 3. ΟΤΑΝ ΣΦΙΓΓΟΥΝ ΤΟ ΧΕΡΙ

Όταν σφίγγουν τό χέρι  
ο ήλιος είναι βέβαιος για τόν κόσμο,

όταν χαμογελάνε  
ένα μικρό χελιδόνη φεύγει μέσ απ’ τ’ άγρια γένια τους,

όταν σκοτώνονται  
η ζωή τραβάει τήν ανηφόρα μέ σημαίες και μέ ταμπούρλα.

#### かれらが握手するとき

かれらが握手するとき  
太陽は世界について確かめる、(\*1)

かれらがほほ笑むとき  
一羽の小さなツバメがかれらの伸び放題のあごひげの中から飛び立つ、(\*2)

かれらが死ぬとき  
いのちは旗とともにそしてタンバリンとともに上り坂をのぼってゆく。(\*3)

---

\*1 Holst訳は、“When they shake hands / The sun is sure of the world”。 Aligizakis訳は、“When they clasp a hand / the sun is certain of the world”。

\*2 Aligizakis訳は、“When they smile / a small swallow flies away from their rough beards”。この「ツバメが…あごひげの中から飛び立つ」はリッツォスらしいシュルレアリスム的な表現。

\*3 Aligizakis訳は、“When they are killed / life follows the uphill with the flags and drums”。この旗は赤旗など左翼運動の旗か、それともギリシア国旗か。

[楽譜]

Ό - ταν σφίγγ - γουν το χέ - ρι—

ό - ταν σφίγγ - γουν το χέ - ρι— ο

ή - λιος εί - ναι βέ - βαι - ος για τον κό - σμο—

ο ή - λιος εί - ναι βέ - βαι - ος για τον

κό - σμο— όταν

2/4拍子の軽快なテンポの曲で、「ロミオシーニ」のうちで「鐘が鳴るだろう」とともにもっとも知られた人気のある曲である。Gail Holstのいう通り、深刻な内容を含むにもかかわらず、軽やかな同じメロディの繰り返しで聴いている方は分かりやすいが、歌詞を聴いてリッツォスの詩であれば何らかの政治的メッセージを読み取ろうとするのだろうか。

実際の歌唱では、Όταν σφίγγουν τό χέριとόταν χαμογελάνεの節の歌詞が2回繰り返して歌われるが、όταν σκοτώνονταιの節の歌詞は計8回歌われる。όταν σκοτώνονται「かれらが死ぬとき...」をテオドラキスが8回も繰り返して歌わせる意図は何だったのか。そして、η ζωή τραβάει την ανηφόρα μέ σημαίες και μέ ταμπούρλαのσημαίες「旗」をどう解釈するかで政治的主張の有無が決まるのかも知れない。川原拓雄の現代ギリシア語辞典[第三版]によれば、σημαίαは「旗」と「国旗」の両方の意味をもつ。

#### 4. ΤΟΣΑ ΧΡΟΝΙΑ

Τόσα χρόνια όλοι πεινάνε, όλοι διψάνε, όλοι σκοτώνονται  
πολιορκημένοι από στεριά καί θάλασσα`

έφαγε η κάψα τά χωράφια τους κ' η αλμύρα πότισε τά σπίτια τους,  
από τίς τρύπες τού πανωφοριού τους μπαινοβγαίνει ο θάνατος.

Πάνω στά καρπούλια πέτρωσαν βιγλίζοντας  
τό μανιασμένο πέλαγο όπου βούλιαξε  
τό σπασμένο κατάρτι τού φεγγαριού.

Τό ψωμί σώθηκε, τά βόλια σώθηκαν,  
τώρα γεμίζουν τά κανόνια τους μόνο μέ την καρδιά τους.

#### このような長い年月

このような長い年月、皆飢えていたし、皆のどが渴いて、  
大地と海に囲まれて皆死んでいった。

猛暑が農地を食いつぶし、塩分がかれらの家に給水されて、  
かれらの外套の穴から死が始終出入りしていたから。(\*1)

月の折れたマストが沈んだ荒れ狂った海を警戒しながら、  
監視台の上でかれらは化石になった。(\*2)

パンは食べ尽くされ、弾丸は撃ち尽くされ、  
今はかれらの心意気だけを大砲に込める。

---

\*1 Aligizakis訳は、“...and salinity has drenched their homes and death goes in and out the holes of their overcoats...”。この死についての表現もリッツォスのシュルレアリスム的な表現か。

\*2 Aligizakis訳は、“Petrified on their battlements and they keep watch on the furious pelagos where the broken mast of the moon sank”。なお、原詩ではΠάνωはΠάνου、πέτρωσανはπετρωμένοιである。

## 5. ΜΠΗΚΑΝ ΣΤΑ ΣΙΔΕΡΑ

Μπήκαν στά σίδερα καί στή φωτιά, κουβέντιασαν μέ τά λιθάρια,  
κεράσανε ρακί τό θάνατο στό καύκαλο τού παππουλή τους,

*στ'Αλώνια τά ίδια αντάμωσαν τό Διγενή καί στρώθηκαν στό δείπνο  
κόβοντας τόν καημό στά δυό  
έτσι πού κόβανε στό γόνατο τό κριθαρένιο τους καρβέλι.*

### かれらは刑務所に入れられて

かれらは刑務所に入れられて火の中で石と語り合い、(\*1)

祖父の頭蓋骨に注いだラキ酒で死をもてなした。(\*2)

同じ脱穀場でディゲニスと出会い、大麦のパンを膝の上で切り取るように悲し  
みをふたつに切り分けながら、かれらは食卓を囲んだ。(\*3)

---

\*1 σίδεραは第1曲では「鉄」の意、ここでは「刑務所」。左翼、リベラル派の政治犯収容所か。  
Holst訳は、“They went into Prison...”。Aligizakis訳は、“They were thrown in iron and fire they  
conversed with rocks”。

\*2 Bien訳は、“They treated Death to a raki served in their grandfathers' skulls”。 Aligizakis訳は“they  
offered raki to death in their grandfathers' skulls...”。

\*3 Bien訳は、“...sat down to dinner slicing their sorrow in two as they used to slice their barley-loaf on  
their knees”。 Aligizakis訳は、“...slicing their grief in two like they sliced their barley bread loaves on  
their knees”。なお、Διγενήはディゲニス・アクリタスを指す。

## 6. ΔΕΝΤΡΟ ΤΟ ΔΕΝΤΡΟ

Δέντρο τό δέντρο, πέτρα τήν πέτρα πέρασαν τόν κόσμο,  
μ'αγκάθια προσκεφάλι πέρασαν τόν ύπνο.

*Φέρναν τή ζωή στά δυό στεγνά τους χέρια σάν ποτάμι.*

Σέ κάθε βήμα κέρδιζαν μιά οργιά ουρανό γιά νά τόν δώσουν.  
Κι όταν χορεύαν στήν πλατεία,

μέσα στά σπίτια τρέμαν τά ταβάνια  
καί κουδουνίζανε τά γυαλικά στά ράφια.

## 木から木へ

木から木へ、石から石へとかれらは世界を渡り歩いたし、  
いばらの枕で睡眠をとった。(\*1)

ふたつの手のひらの中の干乾びた河のような掌線のようにかれらは生きた。(\*2)

一歩ごとにかれらはそれを贈るためにひとひろの空を獲得した。(\*3)  
そして広場でダンスを踊ったときに、  
家の中で天井がぐらぐら揺れて  
棚の中のガラス食器が鳴った。(\*4)

---

\*1 Aligizakis訳は、“Tree by tree stone by stone they passed the world with thorns as pillows they spent their sleep”。

\*2 Aligizakis訳は、“They carried life like a river in their parched hands”。

\*3 Aligizakis訳は、“With every step they won a yard of sky – to give it away”。「ひとひろ」(一尋)は約1.8メートル。1 yardは約0.9メートル。

\*4 Bien訳は、“ceilings shook in the houses and glassware rattled on the shelves...”。

## 7. ΠΟΙΟΣ ΝΑ ΤΟ ΠΕΙ

Και τώρα, πώς κλειδώσανε τήν πόρτα τους τ'αμπέλια μας.  
Πώς λίγνεψε τό φώς πάνω στίς στέγες καί στά δέντρα.

*ποιός νά τό πεί πώς βρίσκονται οί μισοί κάτω απ' τό χώμα  
κ' οι άλλοι μισοί στά σίδερα;*

### だれが言ったのだろうか

そして今、われわれのぶどう畑の門をどのように閉じたのか。  
屋根と木の上の明かりはどのようにして薄暗くなったのか。

大地の下に半分が、そして刑務所に残りの半分があると  
だれが言ったのだろうか？ (\*1)

---

\*1 Holst訳は、“Who can say how half of them found themselves under the ground / And the other half in prison ?”。Aligizakis訳は、“who would have said that half of them are under the earth and the other half in jail ?”。

## 8. ΘΑ ΣΗΜΑΝΟΥΝ ΟΙ ΚΑΜΠΑΝΕΣ

Μέ τόσα φύλλα σού γνέφει ο ήλιος καλημέρα,  
μέ τόσα φλάμπουρα λάμπει, λάμπει ο ουρανός  
καί τούτοι μέσ στά σίδερα καί κείνοι μέσ στό χώμα.

*Σώπα, όπου νάσαι θά σημάουν οι καμπάνες.  
Αυτό τό χώμα είναι δικό τους καί δικό μας.*

Κάτω απ’ τό χώμα  
μέσ στά σταυρωμένα χέρια τους  
κρατάνε τής καμπάνας τό σκοινί  
προσμένουνε τήν ώρα  
προσμένουν νά σημάουν τήν ανάσταση.

Τούτο τό χώμα είναι δικό τους καί δικό μας  
δέν μπορεί κανείς νά μάς τό πάρει.

*Σώπα, όπου νάσαι θά σημάουν οι καμπάνες.  
Αυτό τό χώμα είναι δικό τους καί δικό μας.*

## 鐘が鳴るだろう

太陽があふれんばかりの木漏れ日で君におはようと挨拶し、(\*1)  
空が輝き、とても多くの旗で輝き、  
これらは刑務所の中にあり、それらは大地の中にある。

静かにして！ 今にも鐘が鳴るだろう。(\*2)

この大地はかれらのものであり、そしてわれわれのものである。

大地の下で

かれらの重ね合わせた手の中に

鐘をひくロープをつかんだ

その時刻を待つ

復活を打ち鳴らすのを待つ。(\*3)

その大地はかれらのものであり、そしてわれわれのものである。

それを誰にもわれわれから奪い取らせることはできない。

静かにして！ 今にも鐘が鳴るだろう。

この大地はかれらのものであり、そしてわれわれのものである。

\*1 Aligizakis訳は、“With so many leaves the sun greets you good morning”。

\*2 Holst訳は、“Silence, wherever you are, the bells will ring”。Aligizakis訳は、“Silence any time now the bells will chime”。

\*3 Holst訳は、“They’re waiting for the hour / Waiting to sound the revolution”。ανάστασηを the revolution 「革命」と英訳している。Aligizakis訳は、“waiting for the hour / they wait to ring the resurrection”。ανάστασηを the resurrection と英訳した。これは「キリストの復活、最後の審判日における全人類の復活」の意。

## [楽譜]

### ① Μέ τόσα φύλλα σου γνέφει...

Με τό - σα

φύλ - λα σου γνέ - φει ο ή - λιος κα - λη - μέ - ρα.

② Σώπα, όπου νάναι θά σημάνουν οι καμπάνες.

μα... Σώ - παό - που  
να 'ναι θα ση - μά-νουν οι κα - μπά - νες.

③ Κάτω απ' τό χώμα...

Κά-τω απ' το χώ - μα μες στα σταυ-ρω-μέ-να χέ-ρια  
τους κρα - τά - νε της κα - μπά-νας το σκοι - νί, προ-σμέ-νου-νε την  
ώ - ρα προ - σμέ - νουν να ση - μά-νουν την α - νά-στα - ση

①の歌詞の始まる前のブズーキによる前奏曲は、ギリシア正教会の鐘の音をまさに表現しており、ギリシア人なら日常聞かされる馴染みの深い調べであり宗教的な雰囲気醸し出す。先述したGail Holstの解説を参照。

2/4拍子の出だしのΜέ τόσα φύλλα σου γνέφει...のメロディが、この曲の全体の旋律の流れを予告するように意外性をもって始まり、中程の②Σώπα, όπου νάναι θά σημάνουν οι καμπάνεςでこの曲が終了したかといったん聴衆は思ってしまう。しかし、③Κάτω απ' τό χώμα...のフレーズが2/4、3/4拍子と入れ替わりながら始まる。この個所はメロディが全く異なる印象をもたせて、その歌詞の内容にじっと聴き入らせる効果をもつ。そして、この全く別の曲と思わせる部分が終了するやいなや、②Σώπα, όπου νάναι θά σημάνουν οι καμπάνες に戻って同じメロディに復帰する。聴衆はわれに返る、という印象をもつだろう。

この③の個所の歌詞は、この曲ではもっとも重要なところであり、「復活を

打ち鳴らすのを待つ。」に集約される。Gail Holstは、*ανάσταση*を「革命」と訳したが、この語の意味は「復活、よみがえり、復活祭 (=Πάσχα)」であり、もし「革命」であれば*επανάσταση*を使うべきであろう。創作当時の政治状況から隠語として「復活」を「革命」に読み替えることを期待されていたのかも知れない。しかし、歌詞の上では「革命」ではなく「復活」である。

## 9. ΤΡΑΒΗΞΑΝΕ ΨΗΛΑ

Τραβήξανε ψηλά, πολύ ψηλά.  
Δύσκολο πιά νά χαμηλώσουνε.  
Δύσκολο καί νά πούν τό μπόι τους.

Μέσα στ' αλώνια όπου δειπνήσαν μιά νυχτιά τά παλικάρια  
μένουνε τά λιοκούκουτσα  
καί τό αίμα τό ξερό τού φεγγαριού  
κι ο δεκαπεντασύλλαβος απ' τ' άρματά τους.

*Μένουν τά κυπαρίσσια κι ο δαφνώνας.*

### かれらは高く上った

かれらは高く、とても高く上った。  
さらに下がることは難しい。  
かれらの身の丈を表すことも難しい。(\*1)

ある夜、勇敢な男たちが夕食をとった脱穀場の中に  
オリーブの種子と月の乾いた血と  
かれらの武器の十五音節詩が残っている。(\*2)

糸杉と月桂樹の茂みも残っていた。

---

\*1 Aligizakis訳は、“It’s difficult for them to fit in their own height”。なお、原詩ではμποίはμποίである。

\*2 Bien訳は、“On the threshing floor where one night the stalwarts dined, the olive stones remain and the crusted blood of the moon and the fifteen-syllable verse of their guns”。

Aligizakis訳は、“On the threshing floor where the braves ate one night the olive pits and the dry blood of the moon remain and their fifteen-syllabic armory”。なお、原詩ではστ' αλώνια/στ' αλώνι、παλικάρια は παλληκάριαである。

## おわりに

リッツォスの詩は内戦時のギリシア人の悲惨な生活とGail Holstのいう「苛酷な生活にもかかわらず堅固で禁欲的な名誉のおきてを守った」気質を詩的な言葉で表すばかりで、左翼的な定型のプロパガンダを表面的には含まない。

第3曲、第8曲の「旗」はギリシア国旗とも、左翼運動の旗ともどちらにも取れる。もしギリシア国旗と取ればこの詩は愛国歌としても受け取られる。

第8曲の詩の「復活」を「革命」と解釈するかどうかの問題であるが、文字通り受け取れば「復活」であり「復活祭」である。ギリシア一般大衆にとって何の違和感も生じさせない。

また、第8曲ではギリシア正教会の鐘の音を、詩の中でも曲としても表現しているが、左翼思想と相反する宗教的な鐘の音のもたらす効果は大きい。

一方、テオドラキスはクレフティス民謡やクレタ島リジティカ音楽の伝統に則り作曲を行った。左翼思想の生まれる以前から民衆に歌われてきた音楽であり、大衆にとって左翼思想より人の心を根源から動かすことができるといえよう。その旋律は効果的に詩の言葉を引き立たせて音楽的感性に訴える。

左翼の立場にいたリッツォス、テオドラキスという名前を聞いただけで拒否感を示す人々はいたに違いないが、より多くの大衆にかれらの作品が受け入れられたのは上記の理由によるのだろう。

そして、この作品を受容したギリシア人は自らのアイデンティティを再確認し、ギリシア伝統精神の継承の一翼を自ら担っていると実感したのではないだろうか。

## 参考文献

- 1) ΜΙΚΗΣ ΘΕΟΔΩΡΑΚΗΣ, *Μελοποιημένη Ποίηση, ΤΟΜΟΣ Α, ΤΡΑΓΟΥΔΙΑ*.  
ύψιλον/ βιβλία Αθήνα 1997
- 2) *THEODORAKIS, Myth & Politics in Modern Greek Music*. GAIL HOLST  
Adolf M. Hakkert – Publisher – Amsterdam 1980
- 3) *I HAD THREE LIVES Selected Poems of Mikis Theodorakis*. Translated by  
GAIL HOLST- WARHAFT, Livani Publishing Organization, Athens 2004
- 4) GEORGE GIANNARIS, *Mikis Theodorakis Music and Social Change*.  
George Allen & Unwin Ltd. London 1973
- 5) 『ロミオシーニ』 原詩 :  
ΓΙΑΝΝΗΣ ΡΙΤΣΟΣ *ΡΩΜΙΟΣΥΝΗ* ΤΕΣΣΕΡΑΚΟΣΤΗ ΕΝΑΤΗ ΕΚΔΟΣΗ.  
ΕΚΔΟΣΕΙΣ ΚΕΔΡΟΣ 1990
- 6) *Yannis Ritsos: Selected Poems*. Translated by Nikos Stangos with an Introduction by  
Peter Bien, EFSTATHIADIS GROUP, Athens 1983
- 7) *YANNIS RITSOS POEMS SELECTED BOOKS* Translated by Manolis Edited by  
Apryl Leaf, Libros Libertad Publishing Ltd. Surrey BC, Canada 2010 Kindle Amazon
- 8) *YANNIS RITSOS SELECTED POEMS (1935-1989)* Translation, Introductory Essay,  
Notes and Commentary by George Pilitsis Hellenic College Press, Brookline, MS  
2001
- 9) 楽譜 :  
*Μίκης Θεοδωράκης Πρώτο Βιβλίο, Δεύτερο Βιβλίο, πιάνο-αρμόνιο*  
ΦΙΛΙΠΠΙΟΣ ΝΑΚΑΣ ΜΟΥΣΙΚΟΣ ΟΙΚΟΣ, ΑΘΗΝΑ
- 10) CD1 :  
ΜΙΚΗ ΘΕΟΔΩΡΑΚΗ “ΡΩΜΙΟΣΥΝΗ“ Γιάννη Ρίτσου  
Τραγουδάει : Ο Γρηγόρης Μπιθικώτσης και λαϊκή ορχήστρα  
Διεύθυνση ορχήστρας : Μίκης Θεοδωράκης  
MINOS EMI FABEL SOUND/GREECE 14C 045 702032  
CD2 :  
14 Τραγούδια της τάβλας-Κλέφτικα -14 Banquet & Rebels Songs “Greek Traditional  
Music  
Collection” No.9, FM362, FM RECORDS S.A., Athens  
CD3 :  
ΡΙΖΙΤΙΚΑ ΓΙΑΝΝΗΣ ΜΑΡΚΟΠΟΥΛΟΣ ΝΙΚΟΣ ΞΥΛΟΥΡΗΣ  
7243 873478 2 3 ©1971 EMI ©2005 MINOS-EMI A.E.
- 11) レコード :  
RIZITIKA le chant profond de la Crete Nikos Xylouris chants

Orchestra et choeur Yannis Markopoulos ©'79.12 Nippon Columbia Co., Ltd.

江波戸昭 解説「ゼウス大神の生地＝クレタ島の音楽」より引用。

12) ミキス・テオドラキス, 西村徹・杉村昌昭訳『抵抗の日記』河出書房新社 1975

13) 中井久夫訳『リッツォス詩選集』作品社 2014

14) C.M. ウッドハウス, 西村六郎訳『近代ギリシア史』みすず書房 1997

15) 『ギリシアを知る辞典』周藤芳幸 村田奈々子 東京堂出版 2000

16) 『楽典 理論と実習』石桁真礼生 他 音楽之友社 2016

17) 辞書・文法書：

Γ. Μπαμπινιώτης, *ΛΕΞΙΚΟ ΤΗΣ ΝΕΑΣ ΕΛΛΗΝΙΚΗΣ ΓΛΩΣΣΑΣ Β' Έκδοση*.

Κέντρο Λεξικολογίας Ε.Π.Ε. 2002

D N Stavropoulos, *Oxford Greek-English Learner's Dictionary*

Oxford University Press 1988

川原拓雄『現代ギリシア語辞典 [第三版]』リーベル出版 2004

福田千津子『現代ギリシア語文法ハンドブック』白水社 2009